**202１年度　自己評価・自己点検結果**

202２年４月

**仁心看護専門学校**

評価基準

４：当てはまる　　　　　　　　　　　　　　２：どちらかというと当てはまらない

３：どちらかというと当てはまる　　　　　　１：当てはまらない

・

**総　括**

自己点検・自己評価の結果、４年間の大項目を比較すると2020年度より2021年度はほとんどの項目でポイントが高い。

大項目のⅠ～Ⅳについては近年の評価を上回っている。これは教育理念に始まり教授・学習・評価過程までの一連の教育課程運営において整合性があると評価される。また、今年度からのカリキュラム改正に向けてのカリキュラム見直しや、評価の結果が反映されているとすると、カリキュラムについては良い評価である。

Ⅵの項目に関しては特に低下が著明である。昨年度の入学生が定員を大きく下回ったことも要因と考える。しかし、今年度は近隣の高等学校からの入学者の増加も見られるため、引き続き募集要項の広範囲な配布、高校訪問等で本校の魅力の周知を図っていく。地域社会への働きかけは例年低く課題である。今年度のカリキュラムに「地域を知る」の科目を設定したため学校からも発信を強化していくことが望まれる。

　　　昨年度は新型コロナ感染症のまん延の中でも、入学式・戴灯式・卒業式と学年の節目の行

事を保護者参加のもと実施できたことは学生のモチベーション維持に寄与できたと考える。

感染者の発生はあったが、当人のみの感染で周囲への波及はなかった。早急の対処や感染症対策ができ、健康観察記録や不要不急の行動自粛等が学生に浸透していると考える。

　臨地実習は病院、訪問看護ステーション、地域包括支援センター、就労支援事業所では実

施できたが、介護保険施設や保育園、重度心身障がい児（者）施設等では実施できていな

い。昨年同様、学内実習を工夫することで学習効果を得られたと考える。

3年生の実習では約7割強を臨地で実習でき更に、統合実習を全員臨地実習できたことはリアリティショックの軽減につながると考える。自宅待機や実習中止としながらもカリキュラムを履修できたことは、教員・学生共に日々努力したことと、各実習施設の協力をいただき、期間の追加や変更に対処していただけたことが大きい。

また、これらの結果看護師養成所として資格取得（96.7％）を支援できたが、社会に貢献できる人材育成を目指し今後もカリキュラム運営に努力していく。

**項目ごとの評価**

Ⅰ　教育理念・教育目的

　教育理念・教育目的の教育上の特徴と法との整合性は適切であると評価している。理念の「人間愛」「人間尊重」はキーワードとして学生には定着しており、その理念は学校運営の柱と認識できている。しかし、「4．学生の学習指針となっている」や「6．教育方法」「7．教育環境」のポイントが3.6と他に比して評価が低いのは教育理念・目的に学生への具体的教育活動が表せていないためと考える。2022年度からカリキュラムが変更されるため教育理念・教育目標の見直しを行ったが、表現自体はこれまでと同様のため全員で共通理解することが求められる。

Ⅱ　教育目標

　　　教育目標の評価は平均3.7であり、目標設定の妥当性は評価できる。

教育理念・教育目的との一貫性は評価が高い。しかし、卒業後の継続教育との関連性は明確に提示されていないと評価される。

Ⅲ　教育課程経営

　　　全体的に見ると評価は3.6である。教育計画（単位履修方法）や単位認定基準等については3.9、3.8と評価が高い。教員の教育・研究活動に関しては平均3.5と他に比して低い。しかし、教員が授業準備にとれる時間の確保については3.9と評価が高い。

Ⅳ　教授・学習・評価過程

　　　教育理念から教育目的・目標、単元への考え方は評価が高く授業内容についても評価が3.5である。授業間の重複・整合性・発展性についても調整できていると評価している。

　　　目標達成とフィードバックについては、前年に比して多面的な評価方法が3.1から3.4へと上がっている。評価基準と方法の公表については4.0と全員が「できている」と評価している。また、単位認定の公平性は4.0に近い。

Ⅴ　経営・管理過程

　　　経営・管理過程の中項目の評価は平均2.8～3.5である。財政基盤についての項目が2.8と低い。施設設備の整備のなかで学生及び教職員にとっての福利厚生の整備と学生生活を円滑に送るための整備の項目が2.3，3.0と最も低い。学生生活の支援は3.5と支援体制を評価している。運営計画に関しては長期計画の提示がないが評価は3.0である。

　　自己点検・自己評価は3.1である。評価はほぼ「やや当てはまる」であり、評価したことが明確にフィードバックできていると実感できていない。

Ⅵ　入学

　　　この数年は応募者が少なかったことが、選抜方法の妥当性の評価の低下に関係したと判断する。昨年は新型コロナ感染症のまん延でオープンキャンパスの開催も危ぶまれたが、1日限りの開催に応募者が11名ありそのうち8名が入学している。この2年間は高校訪問も限られており広報が不十分であったため応募数の減少も否めない。今年度の入学者は近隣の高等学校からの応募が増加してきたことは評価できる。また、応募者の中でも卒業生・在校生の知人・親族等の応募があることは強みである。

Ⅶ　卒業・就業・進学

　　　卒業・就業・進学では、卒業生の就業先との連携を図るシステム作りがなかなかできていないことが評価を低くしている。卒業生の活動状況の分析を教育活動に生かす体制が不十分である。

Ⅷ　地域社会／国際交流

　　　地域社会については例年全体的に評価が低い。新カリキュラムとなる今年度は、ボランティア論をカリキュラムに入れたため学生への働きかけや活動が期待できる。

　　　国際交流については、授業科目の設定は3.7と評価が高い。帰国学生・留学生の受入れ体制がないために項目によっては2.1～2.4と低い。

Ⅸ　研究

　　　昨年度の評価は2.8と評価は低い。この2年間は研修機会もなく、学内実習を効果的に行なう方法の研修に特化した年であったことから、研究活動を支援し合う素地の低さを特に感じていることが要因と考える。リモート研修等を積極的に活用していく意識づけが必要である。